

ヤンとララ





ヤンは、魚釣りの名人でした。 毎日、舟からあふれるほど釣れました。



ご近所の野菜作りの名人のお婆さんと、魚を交換します。

お婆さんの猫も、ヤンの魚が大好きでした。



ある日、どうしたことでしょう。一匹も釣れませんでした。
魚を求めて、いつのまにか遠い海に来ていました。
そこでヤンは、女の人が裸で泳いでいるのに出会いました。



女の方は、海の精の娘、ララでした。ヤンは、たちまち恋に落ちました。

結婚を申し込むと、お父さんの海の精が言いました。

「おまえは人間だから、ララと一緒に成れない」

ヤンは、ララと一緒に成れるなら人間でなくても良いのです、と答えました。

「それでは、西の果ての国にある魔法の水と、東の果ての国にある黒い卵を取ってきなさい」

海の精は、おごそかに言いました。

「魔法の水で茹でた黒い卵を食べれば、おまえも、わしらの仲間じゃ」

ヤンは、大喜び。けれども、ヤンは海しか知らない男でした。

西の果ての国や、東の果ての国など、聞いたこともありません。



ヤンが困っていると、鳥のイーヨが、オリを突つきました。

「私は西の果ての国の生まれです。ここから出してくれれば、魔法の水を取って参ります」

ネズミ捕りの中のゲーとチョコキも、負けずに叫びました。

「ぼくらは東の果ての国の生まれです。ここから出してくれれば、黒い卵を取ってきます」



翌朝、太陽が昇るか昇らないうちに、1羽と2匹は出発しました。

長いことオリで暮らしていたイーヨは、飛ぶことができず、ヤンが借りてきた馬に乗り、
駆けて行きました。



イーヨは、たちまち魔法の水を見つけました。
西の果ての国では、魔法の水は有名だったのです。



グーとチョキは、東の果ての国の山また山を越え、ようやく魔法の黒い卵を見つけました。



イーヨは魔法の水を、グーは黒い卵を持って、ヤンの家に急ぎます。



その夜、ヤンは、さっそく魔法の水で黒い卵を茹でました。

黒い卵の殻をむくと、中から白い卵があらわれました。 ひとかじりすると、何ということでしょう

。

急に具合が悪くなり、倒れてしまいました。



ヤンは、花だらけの木箱の中に横たわっていました。

ヤンの家族が集まって泣いています。

近所の野菜作りの名人のお婆さんもやって来て、泣いています。



ヤンは、目を覚ますと、海岸に立っていたので、驚きました。

海の精が、ズンズンと海の奥に向かっていきます。

ララが、ヤンの手をひいています。

不思議にこわくありませんでした。 それどころか、ヤンは幸せでいっぱいでした。



飛べるようになったイーヨが、ヤンを探して、海の上をバッサバッサと飛びまわりましたが、ヤンの姿はどこにも見えませんでした。ただ、波がグルグルグルグル渦を巻いていました。

おしまい